日本中世禅思想の展開

——臨済禅を中心として——

荻須純道

一　栄西と叡山仏教……三
二　円爾弁円の京都禅……八
三　蘭渓道隆の禅道……一三
四　仏光派の禅……一九
(一)　無学祖元と禅の性格……一九
(二)　夢窓疎石の禅思想……二五
(1)　怨親平等の行化……二五
(2)　了義思想……二九
(3)　小玉を呼ぶの手段……三〇
(4)　単提独弄と儱侗不二……三二
五　応燈関……三四
(一)　松源の禅と南浦紹明……三四
(1)　南浦の求道と日多記……三四
(2)　楊岐の正脈……三八
(二)　宗峰妙超……四〇
(1)　求道と長養……四〇
(2)　示衆と遺誡……四二
(三)　関山慧玄……四四
(1)　求道と牧牛……四四
(2)　関山の無相禅……四七

一　栄西と叡山仏教

鎌倉時代に伝来した禅が、いかなる形で受容され、また土着して禅思想が形成されたか、その一端を窺うこととする。まず栄西についてであるが、栄西は入宋すること二回の体験をもつ祖師であり、禅を伝来したばかりでなく、台密の権威者であり、葉上流の一派を開いた学匠として、その名を知られている。すなわち第一回の入宋は仁安三年（一一六八）の二十八才のときであるが、このときすでに伯耆大山の基好法師から台密の秘奥をうけたり、叡山南興房顕意から密灌をうけている。渓嵐拾葉集によれば、栄西は穴太（あのう）流の明匠で、宝珠を作る相応物を尋ねて入宋し、その秘典を口伝したというのである。

しかし第一回の入宋では天台山・育王山を遍歴し、宋でめぐりあった重源とともに、その年の九月帰朝し、請来する天台の章疏三十余部、六十巻を叡山の座主明雲に呈したというのが、普通いわれることである。そして第二回の入宋は文治三年（一一八七）四十七才のときであるが、その頃には台密の権威として円熟し、備前の遍照院や筑前今津の誓願寺で修法を行ったり、宮中に参内し、神泉苑で請雨の修法を行って葉上上人の号を下賜され、奥義を究めて遂に葉上流の祖として一派を開くにいたっているし、また高野山伝法院覚範の請により菩提心論口訣を撰述している。栄西が宋では禅がさかんであることを知り、また伝教大師の内証仏法相承血脈譜や智証大師の教相同異、安然の教時諍論等を読み、禅に関心をもつにいたったとしても、第二回の入宋は、でき得れば入竺して仏蹟を巡拝

したいという渡天思想によるものであった。

この再度入宋により入竺しようとしたが、当時宋は北方民族の侵略により塞外に出ずることを許されず、やむなく天台山万年寺へいったところ虚庵懐敞（きあんえしょう）に相見し参禅の機会を得たのである。在宋五年、遂に虚庵の印可を得ることができた。虚庵は臨済宗黄竜派八世の嫡孫であり、したがって栄西は臨済禅を継承したのである。

建久二年（一一九一）帰朝し、富春庵（筑前）・福慧光寺（肥前）・拘留山孫寺（肥後）・報恩寺（筑前）・千光寺（筑後）等を開創し、建久六年（一一九五）には博多に聖福寺を開創して、仏教界に新風を巻きおこしたところ、筥崎の良弁なるものが叡山の僧徒とともに禅宗停止運動を展開した。ここにおいて栄西はその非を論駁するため、建久九年（一一九八）興禅護国論三巻を撰述した。その主張するところは、叡山の祖伝教大師がすでに禅を継承しているとした。興禅護国論世人決疑門に

日本国は天平中、唐の道璿（どうせん）が大安寺に在って、禅宗を以て行表に授く云云。伝教大師譜の文にも云く、「謹んで某の度縁を案ずるに云く、師主は左京大安寺伝燈法師位行表文」と。其祖璿和上、大唐より持来って写し伝ふる達磨大師の法門比叡山の蔵に在り、延暦の末大唐国に向って請益し、更に達磨大師の付法を受く。大唐貞元二十年十月十三日、天台禅林寺の僧翛然、天竺二大唐二国の付法の血脈並に達磨大師の付法、牛頭山の法門等を伝授せられ、頂載し持ち来って叡山案ず文」其の後今までに四百年に及べるなり。栄西は此の宗の絶えたるを慨き、且つ後五百年の誠説に憑って廃を興し、絶えたるを継がんと欲す。云云。

といい、栄西が主張するところは、伝教大師がすでに北宗禅や牛頭禅を相承しているではないか。円密禅戒の四種

相承によって日本天台は開創されたが、いま禅の相承を欠いているから、この廃絶をおこそうとするものであるとした。

栄西が禅を最も格調高く宣言したのは興禅護国論の序であろう。すなわち云く

大なる哉心や、天の高きは極むべからず、而も心は天の上に出づ。地の厚きは測るべからず、而も心は地の下に出づ。日月の光は踰ゆべからず、而も心は日月光明の表に出づ。大千沙界は窮むべからず、而も心は大千沙界の外に出づ。其れ太虚か、其れ元気か、心は則ち太虚を包んで元気を孕むものなり。天地は我を待って覆載し、日月は我を待って運行し、四時は我を待って発生す。大なる哉心や。吾已むことを得ず強いて之を名づくるなり。是を最上乗と名づけ、亦第一義と名づけ、亦般若実相と名づけ亦無上菩提と名づけ、亦楞厳三昧と名づけ、亦正法眼蔵と名づけ、亦涅槃妙心と名づく。然れば則ち三輪八蔵の文、四樹五葉の旨、打併して箇の裏に在り。大雄氏釈迦文是の心法を以て之を金色の頭陀に伝えて教外別伝と号す。——中略——爰に西来の大師棹を南海に鼓し、錫を東川に杖いてより以降、法眼は高麗に逮び、牛頭は日域に迄る。之を学すれば諸乗通達し、之を篠すれば一生発明す。外涅槃の扶律を打し、内般若の智慧を併すは蓋し是れ禅宗なり。

これは栄西の禅宗開立の宣言である。かれは叡山の圧迫を避けて鎌倉へ下り、将軍頼家や頼朝の室政子の庇護を得て、正治二年(一二〇〇)には鎌倉に寿福寺を開創し、建仁二年(一二〇二)には京都に建仁寺を創めることができた。しかし寿福寺では加持祈禱もしたといわれ、また建仁寺では寺内に真言・止観の二院をおき、円密禅の兼学道場としたのである。栄西は黄竜派の禅を伝えた祖師ではあるが、また同時に台密の権威者であったから、したがってそ

の禅風は密教的性格をもっていたのであろう。無住が沙石集に「国の風儀にそむかずして教門をひかえて戒律・天台・真言なんどあひかねて、下向の唐様を行ぜられず、時を待つゆへにや。又西天も昔は経論あひ兼ねたり。漢土も上代は三学へだてなかりければ、深き心あるべし。殊に真言を面として、禅門は内行なりけり」[1]と記した栄西観は有名であるが、事実栄西はその教養からもまた仏教界の中心地京都においては建仁寺を叡山配下の寺として開創された事情からも、純一な禅風をあげるにはいたらなかったであろう。

また栄西は台密の権威であるばかりでなく、当時の仏教界では「持律第一の葉上房」といわれ、戒律をもって称えられている。建仁寺が開創されてから二年後の元久元年(一二〇四)かれは日本仏法中興願文を撰して朝廷に呈し、持律性を強調した。すなわち云く

> 求法の渡海絶えて三百余年、遣唐使停ること又二百余年、啻に故実漸く訛謬するのみに非ず、亦また墜文永く伝はらざらんか。我が国縦ひ法蔵に富むとも、何ぞ復た一句の墜文を悲しまざらんや。況んや深法時を逐ふて浅近となり、広学人に随って稍く薄解となる。設ひ分に随って解する者あるも、皆名利に随って永く大事因縁のためにせず。或は自ら智人と称して道心においては有るとも亡きが若く、就中律蔵澆漓の世、梵行の比丘跡を削り、福田衰弊の時、人天の依怙全く少れなり。之を謂はんと欲すれば害せらる可し。将に謂はざらんとするも亦為めに知らしめむと欲す。之を為さんこと如何ん。説黙共に煩ひ、進退ここに谷まる。一身の凌辱を忘れて以て三宝の恩徳に報ゆるは是れ仏法を学する者の根源なり。抑〻又加来の本意に非ずや。我が土の衆生このごろ善知識を失ふ。何ぞ此れを資助せざるや。庶幾は輔相智臣心を此の願文に留め、具に奏聞を経せしめ中

興の叡慮を廻らし、仏法王法を修復することは最も望むところなり。小比丘の大願只是れ中興の情なり。誰か復思議すべけんや。其の仏法は先仏後仏の行儀なり。王法は先帝後帝の律令なり。謂く王法は仏法の主なり。仏法は王法の宝なり。是の故に慇懃に見知検察せらるべし。

近世以来、比丘仏法に順はず、唯口よく語る。学者仏儀に習はず、只形状これに似たり。高野大師云く、能く誦し能く言ふは鸚鵡尚能くす。行はざれば何ぞ猩々に異らんや云云。此の言を恥ずべけんや。其の行ひを軽弄せしむること勿れ。然るに近代の人は此れに翻す。持戒を咲ひ、梵行を蔑にす。之を為さんこと如何。小比丘栄西此の凌替を救はんが為に、身命を忘れて両朝に遊び、如来の戒蔵を学し、菩薩の戒律を持つ。先づ門徒に勧め漸く疏人に及ぶ。望み請ふらくは慈恩自利利他の賢慮に住し、沙門を誘進し、比丘を勧励して梵行を修し戒律を持たしめば、仏法再び興り王法永く固からんか。小比丘の願旨斯の若し。

栄西は所信を披瀝して王法仏法の相関論を論じ、持律性を強調して日本に仏法を中興しようとする意図が窺われる。栄西は入宋して虚庵から菩薩戒を受けて帰朝したもののごとくである。円頓三聚一心戒なるものがそれである。(2)

すでに述べたように、栄西は臨済禅をわが国に伝えた祖師ではあるが、台密の権威者であり、建仁寺の寺内に真言・止観の両院を設け、戒律を強調するところは、まさしく叡山仏教の再興であり、日本仏教の中心地であった叡山仏教に画竜点睛したものである。日本天台の祖最澄は円密禅戒の四種相承をし、禅においては達磨血脈譜を伝えたが、その相承を欠くために、栄西はそれを補ったとするのである。栄西は興禅護国論をはじめ出家大綱・日本仏法中興願文・一代経論釈・菩提心論口訣や喫茶養生記等数多くの著述を残し、建保三年（一二一五）七十五才を以て

示寂した。門下の行勇・栄朝等も密教性の強い禅僧であった。

二　円爾弁円の京都禅

栄西は興禅護国論に付記した未来記に、わが没後五十年にして禅宗大いに世に興るであろうことを予言したが、はたして京都には円爾が東福寺を開創し、鎌倉には宋僧蘭渓が来朝して建長寺を開創している。

京都に化を張った円爾は栄西と同様、教禅兼修の立場をとっている。円爾は諱を弁円といい、諡号の聖一国師をもって世に知られている。駿州藁科の人で、幼童の頃から久能山に登り仏道にはげみ、十八才のとき園城寺で剃髪し、つづいて東大寺で登壇受戒した。円爾も栄西と同じように、入宋前上野長楽寺の栄朝や久能山の阿闍梨見西や阿忍から台密の奥義を受け、伝燈大阿闍梨の位に登っている。しかしいまだ教外の旨を得ずとして栄朝のもとを去り、入宋して径山の無準師範に見えて参禅し、在宋六年遂に印可されて帰朝した。

円爾の帰朝は仁治二年（一二四一）であり、宋人謝国明の帰依で博多に承天寺を開創したり、湛慧の招きで太宰府横嶽に崇福寺を開創するなど、大いに鎮西に禅風をあげた。有智山僧徒の妨害もあるが、のち九条道家に招かれ、月輪殿で禅要を講じて道声大いにあがり、東福寺の第一世となった。

さて円爾の家風であるが、まず行履からみて教禅竝置の立場をとっている。円爾は宋の延寿が撰する宗鏡録を後嵯峨天皇に進講したり、九条家一門の人びとに講じた。延寿の家風は宋代仏教界に教禅一致・浄禅双修の思潮を生

み、その潮流は宋代仏教界に大きく流れた。いま円爾は延寿の家風を京都に再現したかの感がある。円爾の講座を聴聞したのは公家ばかりでなく、顕密諸宗の学僧も円爾のもとに掛搭して聴聞した。なかでも真空は廻心といい、三論学者で、東大寺の碩才と称せられた人であるが、円爾に参じて三論教学の奥旨を決したといわれ、また大和竹林寺の良遍は瑜伽・唯識の蘊奥を極めた学僧であったが、円爾に参問し法相宗の極致を論じて真心要訣三巻を撰述し、円爾に書簡を呈して、跋文を求めた。その書簡の一節に「嘗て聞く、禅師学内外を綜べ、解大小に渉り、宋に在ること六年にして径山長老の法を得、臨済和尚の孫となり、大機大悟、無礙の弁ありと。但吾が宗を顧みるに言ありて実なし。恥ずべし悲しむべし。謹んで愚鈔(真心要訣)を作り、以て座下に呈す。願はくは此の縁を以て来世を期せんのみ」[3]といい、円爾は跋文し「竊に鈔記を観るに三性の説を依詮して凡情に堕せず、一実の旨を廃詮して聖位を譲らず、仏語仏心は不即不離にして雙修雙行頓に塵縁を断じ、漸くに習気を除く。無作の作は無功の功を証し、無幻の劫数を覚悟するときは則ち須臾なりと云ふに至っては、此れ則ち宗説兼ね通じ詮旨固く備る。云云」[4]としている。

また天台の座主慈源が顕密の秘奥を問うたり、叡山の静明が四種三昧について問うている。(元亨釈書巻七円爾の章)しかしとくに注目すべきことは円爾に大日経見聞・瑜祇経見聞等の密教に関する撰述のあることである。文永九年(一二七二)鷹司基忠の依頼によって大日経を東福寺方丈において講じたのであるが、それを癡兀大慧(仏通禅師)が筆録したのが大日経見聞である。瑜祇経見聞は癡兀が円爾から面授したものである。癡兀は密教に精通した人であったが、のち円爾の門下となり、枯木集・十牛訣等の著書をのこし、東福寺塔頭願成寺の開祖となった。このよ

うな顕密諸宗の学僧に教学の奥旨を示し、宗鏡録や密教経典を講じたことは、かつて延寿が性相の教学を仏心宗の旨をもって釈したように、延寿の宗風をここに再現したとみることができる。したがってその家風は教禅一致であり、顕密諸宗の前に堂々たる教陣を張ったのである。

なお円爾は儒仏道三教の要旨を講述したということである。すなわち正嘉元年（一二五七）には北条時頼の招きで鎌倉へゆき大明録を講じたり、文永五年（一二六八）には堀川の大相国源基具に三教要略を述べ、また晩年においても建治元年（一二七五）には亀山法皇に三教の旨趣を進講している。あるいは儒教の立場を固執する菅原為長と論争したりしているが、その他随時随処で儒教や道教を語り仏教を宣説したことであろう。この大明録は宋の居士圭堂が宋儒の学説をあげて儒仏道の類似点を指摘したものであり、円爾が径山を辞するとき先師無準が与えたものといわれる。元亨釈書の著者虎関師錬は円爾が将来した典籍のうちに仏法大明録二十篇があるが、この書は謬妄が多いといい、さらにかれが著す済北集に論駁したところがある。しかしながらこの書は儒禅の一致、儒仏道三教の合一といった宋の習合折衷の時代思潮に対応して著されたものであろう。円爾が儒仏道三教の要旨を講じて仏法の流通をはかったことも、径山の先師無準が「三教聖人、同一舌頭、各々門戸を開く。其の旨帰を鞠せば、則ち二致なし。惟禅宗は語言情識の表に超出す。之を無門の門と謂ふ」（無準禅師語録巻六）とした家風をうけたものと思われる。円爾が宗鏡録を講じ、三教の要旨を述べて、仏法を宣説するところは、教禅の一致、儒仏不二といった不二の思想的論拠によるものであろう。

しかし円爾の根本としたものは禅である。九条道家に開示した坐禅論である「聖一国師法語」には

夫坐禅の宗門と云ふは、大解脱の道なり。諸法は皆此の門より流出し、万行もみな此の道より生じ、人天の性命も此の中より開けたり。故に諸仏すでに此の門に安住し、菩薩も亦行じて此の道に入る。乃至小乗及び外道も行ずといへども、末だ正路にかなはず。凡そ顕密の諸宗も此の道を得て自証とす。故に祖師の曰く、十方の智者みな此の宗に入ると宣たまへり。

問曰く、此の禅門を諸法の根本といへること如何。

答曰く、禅とは仏心なり。律とは外相なり。教は言説なり。称名は方便なり。これらの三昧みな仏心より出たり。故に此の宗を根本とするなり。

としている。弘安三年（一二八〇）円爾は病となって示寂した。示寂前東福寺の規範を作ったが、その規範の中にも「円爾、仏鑑禅師（無準師範）の叢林規式を以て一期之を遵行す。永く退転あるべからず」として径山の叢林規式によったことを示している。また禅を究めるのに理致・機関・向上の三種あることを指教している。理教とは経論の所説に即して宗旨を商量さすことであり、機関とは仏祖が時処位に応じてなされる自由な作略であり、向上とは学人が見聞覚知に即して宗旨を自得し究めゆくことである。

これらは禅門独自のありかたではあるが、東福寺の構成は総合仏教の形をとり、真言・止観・宗門（禅）を以て専宗とすることが趣旨であった。九条道家の惣処分によれば

当寺は釈尊在世の遺跡を恋慕し、如来滅後の値遇を欣求し、五丈の聖容を顕し奉り、数箇の堂宇を建立するなり。是れ以て偏に天竺震旦の叢林開堂の風俗を模し、殊に一食長斎の衲僧を定置して、戒定慧の三門を受学せ

しむべく、大小顕密戒律を以て総体となし、真言・止観・宗門(禅)を以て専宗となす。是れ伝教大師の素願なり。

としているように、東福寺は大乗・小乗・顕教・密教・戒律を含む総合仏教であり、また真言・止観・宗門(禅)を専宗とする道場として開創された寺であった。惣処分はさらに安然の教時諍論を引用し

夫れ日本国に九宗の教あり、楊己貶他、未だ道を弘むと謂はず。今仏説に依り八宗皆摂す。伝教大師承るところの血脈内証仏法は乃ち三譜あり。

一、達磨付法
二、天台相承
三、真言血脈

宝林伝が列する禅門付法次第を以て八宗に加へ、今は九宗となす。禅門・天台・真言の此の三法を備ふるは我が一山(叡山)なり。印度斯那も未だ斯の盛んなるものを聞かず。

としているが、もともと叡山には禅門・天台・真言の三法を備えていた。しかし叡山においては天台密教の発展をみたが、禅の進展はなかった。いま東福寺は真言・止観・宗門を専宗とする道場とし、「これ伝教大師の素願なり」としたことは、その趣旨、形態においては叡山仏教の再興であるが、ここにいう宗門(禅)は達摩の祖師禅であり、伝教入唐時代より以後において中国に発展した臨済禅である。だがしかし上来考察して来たように円爾の家風は栄西の禅風と類型を同じくするものである。

三　蘭渓道隆の禅道

円爾と同じ頃、宋僧蘭渓道隆(大覚禅師)が来朝し、北条時頼の庇護で建長寺を開創している。蘭渓は純然たる宋の禅林清規を実践し、鎌倉の武家を中心に接化伝道した。蘭渓につづいて兀庵普寧(ごったんふねい)・大休正念・無学祖元・西礀子曇等の宋僧や元僧の一山一寧をはじめ数多くの中国僧が来朝し、新風をあげるにいたった。これを円爾の京都禅に対して、鎌倉禅というのである。

蘭渓は宋国西蜀涪江の人で、姓は冉氏といい、出家して禅道修行を志し、無準師範・癡絶道冲・北礀居簡等に歴参し、のち蘇州陽山の無明慧性について大悟し嗣法した。無明慧性は松源崇岳の弟子であるから松源の禅を伝持したのである。

蘭渓が日本に来朝したのは寛元四年(一二四六)であり、年令三十三才のときであった。北条時頼の庇護で常楽寺を禅苑に改め、つづいて鎌倉に巨福山建長寺を開創した。そして同年、後深草天皇から「大建長興国禅寺」の勅額が下賜された。これは禅苑開創のことが公認されたものであり、禅宗公認のはじめである。さきに栄西が建仁寺を開創しても円密禅の兼学道場であり、また叡山の末寺でもあった。また道元も純然たる禅ではあったが、まだ公認されたのではなかった。しかし蘭渓はここに禅寺として公認されたのである。

蘭渓はのち正元元年(一二五九)京都建仁寺の第十一世として入寺したが、そのとき建仁寺の寺名を建寧寺と改め

た。後深草天皇の御諱「久仁」の仁を避けたものである。そして叡山の末寺の関係にある建仁寺において、純然たる禅林規式にもとずき開堂の式典をあげた。そして後嵯峨上皇に召されて宮中に参内し、一偈を賦して奏上した。

夙緑深厚到二扶桑一　忝主二精藍一十五霜
大国八宗今鼎盛　建二禅門廃一仰二賢主一

蘭渓が日本へ来朝してからすでに十五年を経ている。しかし当時日本では八宗の顕密諸宗がさかえている。このとき「禅門の廃を建てんとして賢主を仰ぐ」としたことは叡山の反感をかったことは当然であったであろう。蘭渓は弘長元年（一二六一）席を弟子の義翁紹仁（宋僧）にゆずり鎌倉へ下った。しかし従来建仁寺は円密禅の兼学道場であったが、蘭渓の禅林清規の実践により禅宗的な色彩に換えられたと思われる。現在建仁寺では大覚忌を毎歳営む。これは恐らく建仁寺が従来とは異り、独自に禅林清規を営むにいたったことを意味するものであろうと思うのである。鎌倉へ下った蘭渓は時頼に迎えられて禅興寺に入り、再び建長寺に入ったが、流言のため甲斐へ謫流されるなどのことがあった。しかし赦されて鎌倉へかえり、弘安元年（一二七八）建長寺で六十六才を以て示寂した。遺偈にいう

用二翳睛術一　三十余年
打二翻筋斗一　地転天旋

まことに蘭渓は来朝以来三十余年であり、伝禅に生涯をかけた。波瀾の多い生涯であったが、わが国禅宗独立のため重要な役割を演じたものである。

遺著として今日伝わるものに大覚禅師語録三巻の外同語録の拾遺一巻・坐禅論一巻・大覚禅師省行文等がある。これらのものから禅の性格を窺うならば、栄西・円爾の密教的性格に対して祖師禅的性格を強く打出している。そして禅道実践の形を強く打出そうとしてきびしく規矩の実践を学徒に訴えるところが多い。建長寺法語規則によれば

鞭影を見て而して行くは良馬に非ず。訓辞を待って志を発するは実に好僧に非ず。諸兄弟同じく清浄なる伽藍に住して已に饑寒の苦なし。当に此の事を以て茲を念ひ茲に在るべし。若し眼光将に謝せんとする時、其の害甚だ重し。所以に古人道く、直饒汝諸子百家三乗十二分教に通ずるも、汝が分上に於て並に済ふことを得ず。若し無漏道を体すれば、現在当来、誠に広益たり。且く無漏道作麼生か体するや。毎日一箇の屍骸を拖いて上々下々、喜笑怒罵すは更に是れ阿誰ぞ。百人中真実此に回頭返照する者鮮し。纔に不如意の事あれば便ち瞋り詬って行ふ。此の如き何ぞ一二ならんや。参禅弁道は只此の生死の大事を了ぜんが為めなり。豈沐浴放暇の日たりとも、便ち情を恣にし懶慢なる可んや。

長老首座、区々に力行して誰が家の事たるかを知らず、仏袈裟を拄け信施食を受けて、苟も見処なければ他時戴角披毛し、千生万劫にも他を償ひ去ること在らんや。今後沐浴の日、昏鐘鳴って二更三点に至る。四更を転じて暁鐘に至る。竝に坐禅せんことを要す。堂に帰らず寮に趣く者は罰して院を出さしむ。

四更五点の後、聖僧侍者、洗面の桶を収む。五更一点の後、若し洗面の者あらば、罰油一斤、昏鐘鳴って後、定鐘時に至るまで向火を許さず。

二更一点の後、聖僧侍者炉中の火を埋む。若し開き向ふ者あらば、二斤の油を罰す。四更一点より五更二点に至るまで、並に向火を許さず、犯す者は一斤の油を罰す。行歩に声あり、簾を掲ぐるに麁糙なる者は一斤油を罰す。

堂中行ふ所の事、略ゞ一二を呈す。各ゞ宜しく自ら守るべし。此の規を犯すこと勿れ。謹んで屯奉せよ。聞的文具なるに非ず。

住山　道隆(15)（原漢文）

このように己事究明の緊要なることを説き、参禅弁道は生死の大事を了ぜんがためであることを説示しているが、ここに注目すべきことは、教外別伝の旨を強く打出していることである。すなわち「直饒(たとい)汝諸子百家三乗十二分教に通ずるも、汝が分上において並に済ふことを得ず」という臨済録の句を依用していることである。諸子百家三乗十二分教を究めても、知解による博覧強記では、いざ臨終というときには役立たない。参禅弁道はただこの生死の大事を了せんがためであるとしている。このことは栄西・円爾等と異り、純粋に教外別伝の禅の性格を打出しているように思われる。このため規矩は厳格であった。ただ単に定められた規矩だけでなく、今後は沐浴放暇の日でも昏鐘から二更三点(午後十一時)までと、四更(午前二時)から暁鐘にいたるまで坐禅せよといい、その他洗面・向火の時間や行歩の振舞等をきびしく注意し、もし犯す者は罰油何斤を科し、あるいは下山を命ずるという厳格なものであった。

坐禅を重じ知解を排することは、遺誡のうちにも示され「松源一派僧堂規あり、専ら坐禅を要す。其の余は何をか言はんや。千古廃すべからず。これ廃せば則ち禅林何ぞ在らんや。宜しく守行すべし」といい、また「参禅学道

は四六文章に非ず。宜しく活祖意に参ずべし。死話頭を念ずること莫れ」といっている。禅は坐禅による道であることは当然であるが、禅の境界を文学的に表現した詩や四六文章を学びとるのではなく、活祖意に参ずべきことをいましめている。

蘭渓は坐禅論において「夫れ坐禅は大解脱の法門なり。諸法是れより流出し、万行是れより通達す。神通智慧の徳、此の内より起り、人天性命の道、此の内より開く。諸仏已に此の門より出入し、菩薩行じて即ち此の門に入る。二乗は猶ほ半途にあり、外道行ずと雖も正路に入らず。顕密の諸宗此の法を行ぜずして、仏道を成ずるものあらざるなり」と冒頭し、坐禅が諸法の根源であることを説き「禅は仏の内心なり。律は仏の外相なり。教は仏の言語なり。念仏は仏の名号なり。是れ皆仏心より出づ。是の故に根本とするなり」[6]として、坐禅が諸法の根源であることを明かにしている。この坐禅論は聖一国師法語とよく似たところがあり、問答体のすすめかたも似たところがある。しかしこの坐禅論には即心即仏とか三界唯一心、心外無別法といったような後世禅林でさかんにいわれる語句が用いられている。またそれだけに祖師禅の性格を強く打出しているといえよう。次の問答は聖一法語にはない。見性成仏と即心即仏とに差別があるかという問いに答えて

即心即仏とは直に心外に仏なきを示す語なり。若し直にこの旨を承当せば、怜悧の人なり。或は非心非仏とも之れを示す。見性成仏とは、自性を知見し、衆生の命根を截断して、妙性円明なることを了知す。然るときんば生死もなく煩悩もなし。故を以て仮りに名けて成仏となす。仏とは覚なり、従来迷はざることを覚了す。同異なしと雖も、入門差あるに似たり。是の故に両般の語をなす。[7]

と示している。即心即仏とは馬祖の禅である。馬祖が「如何なるか是れ仏」と問われ、即心即仏と答え、またあるときは非心非仏と答えた。この馬祖や百丈の時代は中国における禅の最盛期であった。馬祖・百丈以後、禅宗史は新な展開をしたとされる。すなわち馬祖百丈以前は宗旨を挙揚するのに多くは理を以て学人を激励した。この法門を理致という。また馬祖百丈以後は棒喝を行じ、義解することのできない話頭(公案)を以て雲水を接得した。これを機関という。風をみて帆を使う祖師の手段である。この禅風は中国全土を風靡したが、いま純一に祖師禅を伝えた蘭渓は従来の日本における禅風とは異っていたと思われる。

参禅弁道は四六文章に非ずといい、ひたすら坐禅の宗門を以て学人を接得した蘭渓を、後の夢窓は「鎌倉の最明寺の禅門、建長寺を建立して禅法を崇みらる。其の比は禅僧として衆にまじはる者をば、同じく坐禅を専らにして、経論語録を学するをだに、尚無道心の僧なりと、開山大覚禅師はいましめ玉ひけり。況んや世間の名利をや。ただ僧家のみにあらず、檀那及び家人達も、此の宗を信ずる人はひとへに本分を悟らんことを要とす」と夢中問答に記している。

蘭渓はその著省行文の中に集る学徒を激励し。古の出家は身を労し、饑を忍び、命尽き身おわるまで己事を究明した。であるから百丈禅師は一日作さざれば一日食わずと示したのである。檀那の時頼が飲食・衣服・臥具・湯薬等を供養する信施の意はいずこにあるかといい

謹んで叢林の高士、学法の上人に勧む。各〻胸襟を揣り、細に得失を観ぜよ。庸輩に従って、恣に無知を逞しうすることなかれ。猛く修行を励み、悟を以て則となし、常に良友に咨って、以て見聞を益し、広く琢磨を得

ば、道業成じ易し。果してよく此の如くならば、日に万両の黄金を消じ、銀屋瓊居も分外とせず。若し是の如くならずんば、濫りに僧倫に膺り、仏法の正因、誰に憑ってか紹続せん。親を訪ひ病を問ふも、道に於ては極めて妨ぐ。但だ洞山を学んで、還らずんば益あり。(8)

といい、もし自ら省みて修行怠慢であるなら、仏法の正因は誰によって続がれるのであるか、修行者は親の病を問うことさえも道の妨げとなる。洞山は出家して故郷に帰らず「玉祥・孟宗が孝に似んよりは、目蓮の大孝を学ばん」といったが、この洞山に学んで修行せよという。

来朝以来三十三年、蘭渓の伝禅はわが国に純一な禅風が挙揚されるにいたった。蘭渓以後、鎌倉京都を中心に、純然たる形態で禅が行われるにいたったことは、禅宗独立の上に、その地位のおおいなることを思うのである。

四　仏光派の禅

(一)　無学祖元と禅の性格

蘭渓につづいて鎌倉禅の中心となったのは無学祖元である。祖元の来朝したのは蘭渓が示寂した翌年で、弘安二年(一二七九)のことである。北条時宗の招請をうけ、のち円覚寺を開創して鎌倉禅を代表するにいたった。世に仏光禅師といい、仏光派の派祖としておおいにさかえ、ことに法孫の夢窓疎石がいずるに及んで、仏光派は天下を風

靡するにいたった。蘭溪は松源派の禅を伝えたのであるが、祖元は破庵下無準師範の禅を伝えたのである。東福寺の円爾弁円や建長寺第二世の兀庵普寧等と同門である。生誕したのは宝慶二年（一二二六）であるから、道元が入宋求法した頃である。

祖元は字を子元といい、無学と号した。明州慶元府の人で、姓を許氏といった。十三歳のとき仏門に入り、杭州浄慈寺の北礀居簡を礼して剃髪受具し、翌年から径山の無準師範（仏鑑禅師）のもとで参禅弁道した。一夜徹宵、坐禅三昧の中に板声を聞き、忽爾として省悟した。無準が示寂した後も、石溪心月・偃溪広聞・虚堂智愚・物初大観等の諸名徳について余蘊を究尽した。のち台州の真如寺に住すること七年であったが、当時蒙古の侵入によって、難を温州雁蕩山の能忍寺にのがれた。しかし温州も蒙古のために制圧され、衆僧はみな逃亡したが、祖元はひとり堂裏に兀坐し、兵が加えようとする白刃にも神色動ぜず「乾坤孤笻を卓つるに地なし。喜び得たり人空法亦空なることを。珍重す大元三尺の剣、電光影裡に春風を斬る」と一偈を誦したということは、後人の話柄となったところである。その後天童山で環溪惟一（無準門下）の禅化を扶けたが、時宗の使者徳詮・宗英の二僧がもたらす日本招請のことにより、推されて来朝することになった。ときにわが弘安二年（一二七九）のことであり、宋が滅亡する二年前のことであった。

来朝した祖元は鎌倉に迎えられ、建長寺へ入寺した。時頼をはじめ鎌倉武士の帰仰を得た。元冠の大難にさきだつこと二年であり、世をあげて人心騒然たるものがあり、生死の関頭に立った武士は禅の修道も真剣であったであろう。祖元は時宗に「莫煩悩」の三字を書いて与えたと元亨釈書は記している。時宗はこの国難克服のために金剛

経・円覚経・般若の諸経典を血書して仏天の加被を祈り、祖元に上堂の説法を請うている。結座の法語にいう

結座、菩薩大心を発す。不可思議の力、剝皮と折骨と書写仏功徳、苦衆生を抜済して、皆勝妙楽を獲せしむ。我が此の日本国主帥、平朝臣、深心般若を学ぶ。為に億兆の民を保んず。外魔四に来り侵す。国を挙げて怖畏を生ず。朝臣勇猛を発し、血を出して大経を書す。金剛と円覚と及び諸の般若、精誠所感の処、滴血滄海と化す。滄海渺として際なし。みなこれ仏功徳、重々たる香水海、浮幢刹を照見す。諸仏宝蓮に坐し、常に如是の経を説く。一句と一偈と、一字と一画と、悉く化して神兵となる。なほ天帝釈の彼の修羅と戦ふが如し。この般若の力を念ずれば、みな勝捷を獲ん。今この日本国も亦仏の加被を願ふ。諸聖神の武威に、彼の魔悉く降伏す。生霊みな安きを得るはみな仏の神力なるが故に、世々般若を学び、仏の威猛力に報ぜん。（仏光録巻三、建長語録）

元寇の大難は大暴風雨もおこり、その侵寇は逃れたが、この法語において、祖元のはげしい家風を窺うのである。かつて雁蕩山能忍寺で元兵に白刃を加えられようとしたと伝えられるように、生死を透過した禅傑である。

円覚寺の開創は弘安五年（一二八二）で、元寇の大難が去った翌年のことである。十二月八日の仏成道の日を卜して開堂の式典が行われた。また時宗の発願で地蔵菩薩一千体を造立して円覚寺に安置し、その開眼供養とともに日中両国の戦没者の追悼法要が営まれた。怨親平等の思想によるものである。そして弘安七年（一二八四）時宗は病となり、四月八日落髪し袈裟を着け、三十四歳を一期として没した。法名を法光寺殿道崇公大禅定門といい、祖元の下火は切々たるものがあった。時宗の死後、祖元は建長寺に移り、時宗の三回忌を修した年の弘安九年（一二八六）

九月三日、六十一才で示寂した。遺偈にいう

来亦不前、　去亦不後
百億毛頭獅子現、百億毛頭獅子吼

仏光禅師、円満常照国師と諡され、語録を仏光録といい、遺骨は建長寺に納められたが、のち建武二年、円覚寺正続院に移された。

祖元が演法した仏光録には随処に円覚経・華厳経・楞厳経等が依用されているところがある。時宗は元寇の国難を克服し仏天の加被を祈るため、金剛経・円覚経・般若諸経を血書した。その写経おわって、祖元は陞座説法していることはさきに記したところである。これらの経典は来朝後の建長寺・円覚寺で演法したものに多く依用されている。思うに鎌倉禅を形成した中国僧は言語が不自由であったから、学人接化の手段は当機覿面に学人を接得鉗鎚し、悟入せしめたであろうが、法語を演法するにあたり、これらの経典の写経をすすめたものと思われる。来朝後の仏光録には円覚・楞厳等の経典が教学的基盤をなしているように思われる。

円覚経は詳しくは大方広円覚修多羅了義経といい、この経典の流布につとめたのは唐の圭峰宗密であった。宗密は荷沢神会の系統に属する禅僧で、また清涼の澄観について華厳を学び、禅源諸詮集都序や原人論を著し、また円覚経の註釈をした。すなわち円覚経大鈔二十六巻・円覚経大疏六巻・円覚経大疏科二巻・円覚経略疏四巻・円覚経略疏科二巻・円覚経略鈔十二巻・円覚経道場修証義十八巻・円覚経礼懺略本四巻・円覚経道場六時礼一巻等を撰述

し、その流布につとめた。禅の深い内容を表現しようとすれば、当時さかんであった仏教哲学の最高峯とされる華厳によるべきであるという帰結を得たであろう。華禅の融合・教禅の一致という眼睛を以て註釈がなされたであろう。のち宋代になって長水の子璿は楞厳経義疏十巻を撰述している。子璿は華厳の学僧であるが、洪敏禅師について楞厳経を学び、さらに瑯琊の慧覚禅師に参禅して提撕をうけ、華厳宗を復興した人である。このようにして華禅融合の潮流は宋代仏教界に大きく流れていた。祖元の先師無準師範も覚如居士周琪が著す円覚経夾頌集解講義に跋文をしている。

円覚経集注に跋す

喚んで円と作さば虧欠し了るなり。箇の覚を道へば迷昧し了るなり。黄面の瞿曇(釈尊)、十二大士の密説顕説は已に是れ注解さる。其の余の経師論師は注解中に於て、又解注を添ふ。且く正文畢竟什麼処にか在る。恁麼に問はば好し三十拄杖を与へん。覚如居士儻能く手を下さば径山(無準)甘受して辞せず。(9)

この書は孝宗の「御註」と華厳系の復庵の「類解」と天台系の智聰の「心鏡」とを引用して釈したものとされる。いま無準は円覚経の根本はいずれのところにあるか、もしそう問うなら三十棒を与えよう。しかしもし覚如居士が自ら手を下して示すなら、甘んじてその三十棒を受けようというのである。このような宋代仏教界の思潮が祖元にも投影したものと思われるのである。

弘安五年、円覚寺が開創されたとき、地中から円覚の二字がある石櫃が発掘されたので、寺名を円覚寺としたと伝えられるが、時宗が血で円覚経を写経したことにもよるのではないかと思われる。そして仏殿を大光明殿と名づ

け、本尊として宝冠の釈迦仏、脇侍として円覚会上の十二菩薩、別に観音菩薩や千体地蔵菩薩を安置したのである。円覚経の序分によれば「一時、婆伽婆、神通にて大光明三昧に入り正受し、一切の如来と光厳住持す。是れ諸の衆生の清浄覚地なり」とあるから、仏殿を大光明殿と名づけたのも、この大光明三昧からとったものと思われる。脇侍の十二菩薩とは文殊師利菩薩・普賢菩薩・普眼菩薩・金剛蔵菩薩・弥勒菩薩・清浄慧菩薩・威徳自在菩薩・弁音菩薩・浄諸業障菩薩・普覚菩薩・円覚菩薩・賢善首菩薩であり、これらの十二菩薩がそれぞれ問者となり、世尊に請問し、世尊が答説されたのが円覚経である。祖元が開堂の日の法語に

会す麼、無上法王に大陀羅尼門あり、名づけて円覚となす。一切清浄真如菩提涅槃を流出す。過去の諸如来、斯の門すでに成就し、現在の諸菩薩、各〻円明に入る。未来修学の人、当に依って此の如く住すべし。恁麼に見得せば、便ち見ん。無方清浄、無辺虚空、一身清浄、一身清浄なるが故に、多身清浄、多身清浄なるが故に、乃至十方の衆生清浄ならずといふことなし。虚空を尽して一切平等清浄。（大衆を顧視して云く）青山は左転し、滄海は右盤す。日は東より出で、斗は南に向って移る。爍迦羅眼、停機せず。万象森羅、転轆轤、是れ汝諸人若し這裏に向って、意、玄を停めず、眼、戸に掛けずんば、便ち清浄宝殿に登って大円覚を証し、菩提を満足すべし。(10)

円覚とは円満なる覚性の意であり、この「無上法王に大陀羅尼門あり、名づけて円覚となす。一切清浄真如菩提涅槃波羅密を流出す」とは円覚経の文殊章にある語であり、「無方清浄、無辺虚空」以下の語は普賢章に見出される。このように祖元は円覚経を依用して禅を提示している。その他仏光録（巻三）には越州太守の夫人の請により楞

厳経を依用して説法したり、時宗(法光寺殿)の三回忌には夫人(覚山大姉)が華厳経八十一巻を書写して時宗の冥福を祈ったが、このとき祖元は華厳経を依用して説法している。

これらの経典が依用されて禅が演法されることは宗密や子璿によって試みられた華禅融合の思想的影響ということが窺われるのである。祖元はもちろん機鋒のするどい禅傑であったが、演法の表現において華厳的性格があったと思われる。思うに先師無準は宋の習合折衷の時代思潮に対応して禅風をあげた宗匠であるから、その影響ということも考えられる。同門の円爾は密教的性格を以て京都禅を代表する禅者であったが、祖元の禅はのちさかえて鎌倉禅を代表するにいたった。

(二) 夢窓疎石の禅思想

(1) 怨親平等の行化

祖元の禅は高峰顕日(仏国禅師)を経て夢窓疎石に伝わった。高峰は後嵯峨天皇の皇子で、東福寺の円爾弁円や来朝した兀庵普寧につき、のち祖元によって印可された。那須の雲巌寺を開創し、また鎌倉の浄智寺や万寿寺に住して禅風をあげ、鎮西の南浦紹明(大応国師)とともに、東に仏国、西に大応といわれ、当時禅界の雙璧といわれた。

この高峰に嗣法したのが夢窓であった。はじめ鎌倉禅は中国僧によって純一に祖師禅が移植され、禅林の規矩が実践された。最初は言語も十分通じないし、習慣も実践道法も従来の仏教とは全く異っていた。しかしその禅が日本人によって受容され、一両伝して夢窓が出現したころは、も早や禅は日本的に受容され土着化して成長した。禅

とともにわが国に移植された宋代文化も発展し、さらにわが国独自の発展を遂げた華道・茶道・庭園・絵画等の禅文化を形成するにいたった。禅宗史上夢窓は重要な地位にある。

夢窓疎石は伊勢の人で、姓を佐々木氏といい、出家して禅を仏光派の高峰顕日に承け、足利尊氏の庇護のもとに天竜寺の開山となり、世に七朝の帝師として知られている。夢窓が生誕したのは建治元年（一二七五）であり、示寂したのは観応二年（一三五一）である。それで夢窓が生存したのは鎌倉から南北朝にかけてであり、その間朝廷においては大覚寺統と持明院統、朝廷と幕府、南朝と北朝とが対立し、戦乱と争いにあけくれした混迷の世であった。このような時代に夢窓は生存し、出家して仏者となり、禅道修行を志して禅を究尽し、高峰顕日によって印可されたのであるが、教化面に思想としてあらわれたものはなんであったか。まず第一にあぐべきものは怨親平等の思想である。

元弘の役で幕府はたおれ、建武中興の業はなったとはいえ、まもなく南北両朝の対立となった。戦乱につぐ戦乱は幾多の人命をそこね、神社仏閣、官衙、民屋は焼かれ、憎しみと怒りの修羅場を現出し、いつはてるともはかり知ることができない。延元四年（一三三九）八月、後醍醐天皇が吉野の行宮で崩ぜられ、夢窓は尊氏、直義兄弟に罪業観の反省をさし、懺謝さして、天皇の御菩提を弔うために暦応資聖禅寺すなわち天竜寺の開創となった。夢窓国師語録によれば

元弘の大乱の時、征夷将軍、特に勅命を奉じて、速に国敵を亡す。茲に因って官位日日喬に遷り、名望人々観を改む。忽ち讒虎威獰を長ずるによって、茲に逆鱗の回避し難きことを得たり。其の由来を繹ぬれば、併せて

是れ疾かに功業を成して、甚だ叡襟に慊ふの致す所なり。古者道く「親は是れ怨の媒と為る」と。其れ此の謂か。茲に祥雲散じて、竜馭慮らず南山に幸し簫韶声消じて、鳳輦復た北闕に還らず。武家大息して以謂らく、悲しい哉臣遂に讒諛に堕ちて陳謝すること及ばず、永く逆臣の謬に沈むのみ。故を以て武家の愁歎、常流よりも切なり。敢て恨緒を以て懐に介せず、自ら丹悰を瀝ぎ、特に白業を修す。専ら覚果を祈り奉らんと欲して、遂に見る大伽藍を建てて大仏事を作すことを。[11]

これは夢窓が示寂する一ヶ月前の観応二年八月十六日、後醍醐天皇十三回御聖忌にあたっての法語の一節である。天竜寺の建立は専ら天皇の覚果を祈りたてまつるためであり、そのよって来るところは怨親平等の思想である。さとりの真如清浄の法界においては親もなく、怨もないのであるが、一迷わずかに生ずれば万鏡したがって現ずるの理で、怨となり親となり、敵となり味方となって争う混迷の世となる。夢窓の平和への祈りは怨親の二元を超えることであった。天竜寺建立とともに、安国寺、利生塔を日本六十六ヶ国二島(壱岐・対島)に建立しようとしたことも、この怨親平等の思想からであった。また夢窓国師語録には次のように記されている。

爰に元弘以来天下大いに乱る。翅、戦場の兵卒多く躯命を殞すのみにあらず、山野飛走(禽獣)に至るまで、亦其の余殃に罹り、神廟仏堂、朱門白屋、或は兵火のために焚かれ、或は賊徒のために懐せらる。嗚呼、災の物を害すること此れに加ふることなし。其の天災の来歴を繹ぬるに、世運の否屯より出でたり、所謂否屯は外より来らず。此れ乃ち積劫業債の然らしむるなり。業債の因由亦他の作に非ず。只是れ一念無明の感ずる所なり。夙植深厚の人に非ざれば、能く之を知ることなし。或は知って故に犯すことあるものは、仏祖も亦未だ之を如

何ともすることあらざるのみ。茲者、征夷将軍源朝臣(尊氏)左武衛将軍源朝臣(直義)、真智内に薫じ、霊機外に発す。自ら慚愧を懐ひて、僭尤を謝せんと欲して具に丹悃を陳べて、上叙聞に達す。伸ぶる所の懇志、深く叡襟に協ふ。乃ち聖旨を奉じて扶桑国中に於て州毎に一寺一塔を建立して、普く元弘以来の戦死傷亡、一切の魂儀のために覚路を資薦す。

又暦応年中、特に叡願を立てて、此の皇宮を革めて以て梵苑と作し、先皇の為めにし奉り、寧場を厳飾す。又武家に命じて、其の営造を董す。年を経ること未だ幾ならざるに、不日にして功を成す。寔に是れ君臣道合し、天竜保持するの致す所のみ。便ち見る物、否を終へずして、悪事転じて善事と成り、法定相なし。逆縁却って順縁と為ることを。此れ其の禍福同源、寃親一体の所以なるものなり。兵革の世を乱ること適今のみに非ず。上古も亦夥し。其の端緒を原ぬるに、或は国祚を争ひ、或は判逆を誅す。其の中一負一勝、只是れ業を増し寃を増すのみ。未だ悪縁を転じて善縁と為すこと、今日の如くなることを聞かず。云々(12)

戦乱の悲劇は世運のゆきづまりから来るものである。このゆきづまりはもともと永年積み来った業債によるものである。この業債も一念の無明によるものである。いま尊氏・直義兄弟が慚愧懺謝して、後醍醐天皇のご冥福を祈るために天竜寺を建て、また元弘以来の戦死傷亡、一切の魂儀を覚路に資薦するため、州毎に安国寺・利生塔を建てることにより、逆縁転じて順縁となる。これは禍福同源、怨親一体であると説いている。かつて法祖父祖元は元寇の役後、円覚寺が開創されたとき、一千体の地蔵菩薩像を安置して日中両国の戦病没者の慰霊をした。その心は怨親平等の思想であった。夢窓の願いは尊氏・直義をはじめ、南朝と北朝とを問わず、混迷の世の人々が、怨と親、

敵と味方といった二元を超えた真如清浄の世界観に立つことであった。この世界観に立ってこそ全人類の平和があろう。おそらく夢窓は幼童の頃からこのことに悩み仏門に入って仏道修行をしたのではないかと思うのである。夢窓の父は伊勢源氏の流れを汲むというし、母は平氏であった。そして父は母方の一族のために追われ、四才のとき甲斐に移住したが間もなく母は死去した。親族の争い、母の死、これは堪えられないことであった。晩年天竜寺を開創するにあたって、怨親平等を演法したことは、心血を吐く叫びであった。この怨親平等はさらにいかなる思想に基くかを窺ってみよう。

(2) 了義思想

夢窓の禅が思想として表現されているものは了義思想である。夢窓は夢中問答に「涅槃・宝積等の経の中にいはく、仏説の中に了義経と不了義経との二種あり。末代の衆生了義経の説に依りて、不了義の説に依るべからず。凡夫の外に仏あり、穢土の外に浄土ありと説けるは不了義の経なり。凡聖浄穢皆差別なしと明せるは了義大乗の説なり。云々」[13]といい、了義とは凡夫と仏、穢土と浄土といったように差別して考えるのではなく、凡聖一如であり、浄穢不二を意味するのである。さらに谷響集には華厳の思想を以て次のようにいっている。

平等の一理に約すれば、浄穢凡聖の勝劣なし。差別の事門に約すれば、凡夫は賤しく、聖人は貴し。穢土は劣なり、浄土は勝たりと云。かやうの法門も亦是れ不了義なり。了義大乗の意は、たとひ差別門に約すれども、十界の依正相即互融して事々無礙なること帝網のごとし。身土も互融し、体用も相即する故に、一毛孔の中に

諸の刹土を現じ、微塵の中に無量の身を顕す。其身は是れ不思議なり。すべて法身、色身の差異なし。其土も亦不思議土なり。何ぞ穢土浄土の勝劣あらんや。唯身土のみにあらず、法門も亦かくのごとし。一法の中に無量の義あり。一字の中に百千の理あり。[14]

了義大乗の思想は本体の平等の理からして浄穢凡聖すべて不二であり、勝劣がないばかりでなく、差別門の立場から見ても、現象としてあらわれたすべての事象は、本体と現象とが相即したものであり、四聖（仏・菩薩・縁覚・声聞）六凡（天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄）の十界は依正相即し互にさわりなく融合している。その現象の事と事がさわりなく融合している。それは恰も帝釈天宮にあるインドラ網のごとく、網の目の結び目にある無数の珠玉が互に相映じているようなものであるといい、夢窓は華厳の事々無礙法界をもって差別門を説き、了義不二の思想を強調している。

(3) 小玉を呼ぶの手段

この了義の思想をもつ夢窓は接化においても広い態度をもっていた。夢中問答に示していうには「明眼の宗師は胸の中にかねてよりたくはへたる法門なし、只是れ機に当って提示し口に信せて道著す。すべて定まれる窠窟なし。若し人禅を問ふ時、或は孔孟老荘の言を以て答ふる事もあり、或は教家所談の法門を以て答ふる時もあり、或は世俗の諺を以て答ふる事もあり、或は目前の境界をしめす時もあり、或は棒を行じ、喝を下し、指を挙げ、拳をささぐ、皆是れ宗師の手段なり。これを禅門の活弄となづく」[15]としている。学人を本分の田地にいたらしめ、さとりの

境界に導くために孔孟老荘のことばを用いたり、教相のことばや世俗の諺をもって示すこともある。趙州の庭前の栢樹子、徳山の三十棒、臨済の一喝、天竜一指頭の禅等すべて宗師の活手段であるといっている。

夢窓はよく「小玉を呼ぶの手段」ということをいう。その著西山夜話によれば、明眼の宗師が学人接化のために、東語西話して説示するところは異っているが、それはみな小玉を呼ぶの手段である。もし学人が言外の旨をさとることができるなら、宗師の言句はなんらささわりはないといい、また禅の傾向においても、馬祖・百丈以前の祖師は理をもって激励する理致が多かったが、馬祖・百丈以後は棒喝を行じ、義解にわたらない話頭を示す機関が多くなった。しかし祖師の宗旨は理致・機関にあるのではなく、これは小玉を叫ぶの手段であるとしている。

小玉を呼ぶの手段とは、五祖法演が官人陳提刑に示した小艶の詩である。

一段風光画不成　洞房深処惱愁情
頻呼小玉元無事　只要檀郎認得声[18]

「一段の風光画けども成らず、洞房深き処愁情に悩む。頻りに小玉を呼ぶも元より事なし。只要す檀郎が声を認得せんことを」という詩から出たものである。この詩は女性の作であり、小玉とは侍婢の名である。そして檀郎とはその女性の情人を指すのである。夢窓は夢中問答に説明し「昔官人ありて五祖の演和尚に参じて、禅門の宗風を問いたてまつる。五祖の云く、吾が家の宗風は情識の解了すべきことにあらず。然れども小艶の詩に云く、一段の風光画けども成らず、洞房深き処に愁情をのぶ。頻りに小玉を呼ぶも元より事なし。ただ檀郎が声を認得せんことを要す。此の詩の意によせて大概をしるべしと云々。此の詩は女人の作なり。檀郎とはこの女人の忍びて申しかよ

はせる男なり。有る時彼の男、此の女人のすみける洞房の辺に来りてあそびけり。此の時女人我は此の洞房の内にありとしらせたく思へども、外聞もつつましく覚ゆる程に、めしつかふ小玉をしきりによびて、障子をあけよ簾をおろせなんどいへども、其の意すべてかやうの用事にはあらず、ただ偏に彼の男の此の声を聞きつけて、此の女房は此の内にありけりと、しらんことを要するなり[027]」とし、小玉を呼ぶの手段とは言外の意をさとらすための手段である。

(4) 単提独弄と儒仏不二

夢窓が了義思想をもち、小玉を呼ぶの手段として東語西話し、広く経典を依用して法語を記しているが、禅門の宗師としては「単(ひとえ)に祖師の心印を相承す。これを単提独弄となづく」ということであった。単提独弄とは単刀を提げ、独り敵陣に突入することで、人を接するに方便手段を弄せず驀直に本分の宗旨を提示することが根本であった。それで

> 或は始は教門を学して、後に禅宗を悟り給へる人あり。其中に本分を悟れりといへども、いまだ活祖の手段をあきらめざる故に機に対して垂示する時、多くは教門の本宗をわきはさみて挙揚せられたる人あり。かやうの人も亦かやうの機根を誘引するには益あり。この故に宗門相承の血脈にはつらねたり。然れども的伝正流の人は、これをきらひ給へり。[028]

としている。広い教養をもち、おだやかな性格をもった夢窓ではあるが、宗師としては単提独弄のきびしさをもっ

ていた。しかし「小玉を呼ぶの手段」として孔孟老荘の言をもって禅を示すこともあるとする夢窓の門下には外典の研鑽をこととする禅僧もあり、西山夜話には誡めているところがある。しかし夢窓のもとには英才があつまり、宋元文化の受容という時代の要請と相俟って、夢窓門下には春屋妙葩（相国寺創建開山普明国師・天下僧録司・雲門一曲）をはじめ義堂周信（空華集）絶海中津（蕉堅稿）等幾多の学僧詩僧を輩出し、五山文学の隆盛を見るにいたった。夢窓は遺誡し

我に三等の弟子あり。所謂猛烈に諸縁を放下し、専一に己事を究明す。これを上等となす。修行純ならず駁雑にして学を好む、これを中等と謂ふ。自ら己霊の光輝を昧まし、只仏祖の涎唾を嗜む、此れを下等と名づく。如し其れ心を外書に酔はし、業を文筆に立つる者は此れ剃頭の俗人なり。以て下等と作すに足らず。矧んや飽食安眠放逸に時を過す者、これ緇流といふべけんや。古人喚んで衣架飯嚢と作す。(19)

業を文筆に立つる者は剃頭の俗人なりときびしく遺誡している。しかし夢窓の門下法孫には幾多の詩僧学僧を輩出した。宋の契嵩が輔教編を撰して儒釈一貫の理を明かにしたことにより、これが五山禅僧の儒仏不二の理論となり、詩禅一致を実践するにいたったが、夢窓の了義の禅思想も儒仏不二の思想としても発展したであろう。思うに中世に伝来した禅は夢窓にいたって思想として成立したと思うのである。

五　応　燈　関

(一)　松源の禅と南浦紹明

(1)　南浦の求道と日多記

上来、わが国における臨済禅の主流となった栄西・聖一の教禅兼修のものと、鎌倉禅の中心となった大覚・仏光についてのべて来た。ことに仏光派から夢窓がいで、禅が黄金時代を現出し、思想文化の面にも独自のものを打出す基盤ができたことを窺って来た。来朝した中国僧は純一に祖師禅を伝えたのであるが、これとは別に日本人によって純一に禅を伝えた大応派すなわち応燈関の一流がある。応燈関とは大応(南浦紹明)・大燈(宗峰妙超)・関山慧玄の三師一連の門流をいうのである。この一流のみが、今日にいたるまで、その命脈を持続しているところに、この応燈関の重要性がある。

この応燈関の先蹤をなすものは宋の松源の禅であり、臨済楊岐の系統に属するのである。わが国に松源の禅を伝えた禅者は建長寺の開山となった蘭溪道隆と南浦紹明である。すなわち松源崇岳には無明慧性と運庵普巖の二大門下があったが、前者の法を嗣いだのが蘭溪であり、後者から虚堂智愚を経て南浦紹明を出している。この松源の流れを汲む蘭溪や南浦はともに自己を深く掘り下げることに重点がおかれ、禅道究尽の大力量底が重じられている。

このことを東嶺は宗門無尽燈論に「ここに向上出身の一路あり、これを祖師不伝の一著という」といい、向上の一路、千聖不伝であり、これを末後の一句ともいうといい、仏祖が仏心印を的々相承して来たのもこの一著子であったという。末後の一句とは仏道終極の玄妙の一句である。東嶺にしたがえば、たとえ玄妙を究尽し、重関を透過して向上難透の因縁を見徹しても、この些子の事につまずくという。それで聖一国師は理致・機関・向上の三法をたてたが、向上の一著においては別に禅の力量を得るものであることを示したもので、禅宗が諸宗に冠たる所以はまさにこの些子を伝えるからであるとしている。もしただ見性明了で、もって足れりとするなら、別にわが宗を立てるまでもないといい、向上出身の一路は禅宗のすぐれたところであることを指摘している。[四] 応燈関の一流はここに重点がおかれたのであろう。

南浦紹明は駿州安部郡の人で、生誕したのは嘉禎元年（一二三五）である。出家して鎌倉建長寺の蘭溪道隆（大覚）に就いたのは十五才のときであり、正元元年（一二五九）入宋して虚堂智愚に相見し、その室に投じたのは二十五才のときであるから、すでに十年の禅道修行をおえている。しかも蘭溪の禅室がきびしかったことは、さきに一言し窺ってきたごとくである。それで南浦は入宋前に修行事が相当すすんでいたと思われる。

虚堂は松源の嫡孫であり、門風高峻をもって知られた宗師であった。虚堂はその性格が一般社会の風俗習慣といった方俗は問題としないし、時代の風潮におもねるということもなかった。しかし事に臨んでは厳然として宥恕しなかった。貴賤親疎の別なく呵斥したといわれる。その高峻な門風はよりつきがたいものがあった。杭州浄慈寺で虚堂のもとにあって鉗鎚をうけた南浦は咸淳元年（一二六五）虚堂の寿像に賛詞を請うた。その賛には

紹既に明白、語宗を失はず、手頭鞅弄す、金圏栗蓬、大唐国裡人の会するなし。又却って流に乗じて海東に過ぐ。[21]（原漢文、虚堂録巻十）

虚堂は「紹既明白」といい、南浦の悟道がすすんだことを証している。一語を吐くも臨済の宗旨を失わないし、また鉄の牢屋か栗のいがのような、手にも歯にも合わない楊岐の禅を自由にとりまわすにいたったと称えている。金圏栗蓬[22]とは楊岐の禅を意味する。虚堂が浄慈寺から径山の万寿寺へ移憧したとき、南浦も随侍し、一夜坐禅三昧の中にあって、大悟し、

忽然として心境共に忘ずる時
大地山河機を透脱し
法王の法身全体現ず
時人相対して相知らず

と偈を作って虚堂に呈した。虚堂巡寮して衆に告げ「這の漢、参禅大徹せり」といい、このため一衆観を改めたという。咸淳三年（一二六七）秋、径山を辞して帰朝しようとしたとき一偈を与えた。

敲磕門庭細揣磨　路頭尽処再経過
明明説与虚堂叟　東海児孫日転多

門庭を敲磕し細に揣磨し、路頭尽くる処再び経過す。明明に説与す虚堂叟、東海の児孫日に転た多からん

これをわが禅界では日多の記と呼んでいる。関山の遺誡に「路頭再過の称を得て、児孫日多の記を受け、楊岐の

正脈を吾が朝に単伝するは老祖の功なり」と称えている。虚堂はこの偈に付記して

明知客発明より後、日本に帰らんと欲す。尋いで照知客、通首座、源長老頭を聚めて竜峯会裡の家私を語る。紙を袖にして法語を求む。老僧今年八十三。思索するに力なし。一偈を作り以て行色に贈す。万里水程道を以て珍衛せよ。咸淳丁卯、大唐径山に住する智愚不動軒に書す。[23]

虚堂は八十三才の高令であり、思索する力なく一偈を以て贈すといい、万里水程道を以て珍衛せよと慈愛あふるるものがある。東嶺はこの日多の記につき「祖の門庭を敲磕して、審細に揣磨すること、千転万過、参ずべき底の禅、悉く参じ尽し、明むべき底の法、悉く透過し尽す。知らず、今は個の什麼にか参ぜん。一箇の参ずる底を求むるに、終に不可得なり。是を路頭尽る処という」[24]としている。これによって後世南浦は東海の第一祖として称えられている。

南浦は在宋八年、文永四年（一二六七）帰朝した。ときに年三十三才であった。鎌倉建長寺で蘭渓に見え、両三年の後、筑前の興徳寺・崇福寺等に住しておおいに禅風をあげ、鎮西に化を布くこと三十三年であり、当時東の仏国とともに天下の二甘露門（善知識）といわれた。嘉元二年（一三〇四）、後宇多上皇の勅詔で上洛し、万寿寺に住し、さらに嘉元寺を開創しようとして叡山に反対されて、鎌倉へ下り、延慶元年（一三〇八）七十四才で示寂した。遺偈に云く

訶風罵雨、仏祖不知、一機瞥転、閃電猶遅、（風を訶し雨を罵る、仏祖も知らず、一機瞥転、閃電も猶遅し）

(2) 楊岐の正脈

南浦は楊岐の正脈をわが朝に単伝したという。では楊岐の正脈とはいかなることであろうか。枯淡な家風の楊岐方会の禅は白雲守端を経て五祖法演に伝わった。五祖法演は臨済中興の祖と称えられる祖師である。法演は諸老歴参の後、白雲に参じて余蘊を究めた。あるとき白雲がいうのに「近日数人の禅客があった。みな悟入するところがあり、かれをして禅を説かしめれば説き得るし、下語もでき、古今を批判することもできる。しかしただ未在である」と。ここにおいて法演はおおいに疑い、すでに悟り了り、説くこともでき、明むこともでき得て、なおかつ未在であると示されたのである。これより法演は累日参究し、飲食も味わいなく、ひたすら参禅専一であったが、遂にその深旨をさとり得たという。廬山から来たという禅客は、当時文人士太夫がきそって参じた黄竜の禅者であったであろう。無尽燈論は法演の示衆を記し、次のようにいっている。

「某十五年行脚、初め遷和尚に参じて其毛を得、次に四海に於て尊宿に参見し其皮を得、又浮山円鑑老の処に到って其骨を得、後に白雲端和尚の処に在って其髄を得たり。方に敢て承受して、人の与に人師と為る」と。看よ他許多の艱難を喫し尽して、始めて以て大善知識と称するに堪へたり。貴ぶべし臨済の中興、若し是の如くならずんば、児孫豈今日あらんや。[25]

このようにして五祖法演は臨済の中興とされ、正脈を相承したとされる。法演の門下には円悟克勤があり、円悟門下には大慧宗杲と虎丘紹隆があるが、のち法脈のさかえたのは瞎睡虎といわれた虎丘紹隆の系統であり、虎丘か

ら応庵曇華・密庵咸傑・松源崇岳・運庵普巖・虚堂智愚と次第して、わが南浦紹明(大応)にいたる。しかし大慧は看話禅を提唱した抜群の禅傑であった。かつて梅州に配流されたとき、応庵曇華が挙揚する法語を伝えきき、おおいに喜んで「楊岐の正脈は此の老に在り」といい、正伝の衣竝に頌を寄せたという。

金輪の第一峯に坐断し、千妖百怪尽く蹤を潜む。近来又真の消息を得たり。報じて道ふ楊岐正脈通ずることを[26]

これによって楊岐正脈は応庵曇華に伝わり、授々嫡伝して南浦にいたったものとされる。

また仏祖の正脈を中興したといわれる五祖法演は臨済の大機大用に雲門の知見言句を統摂して宗風を一転せしめたとされる。東嶺をしていわしむれば「雲門の妙唱あって、若し臨済の大機なくんば、恰も天子の位あって将軍の威なきが如し。其の弊畢竟じて玄微に堕せん。玄微変じて細賦とならん。――中略――然し又臨済の大機あって、若し雲門の妙唱なくんば、却って将軍の威あって天子の位なきに似たり。其の弊畢竟じて嶮奇に堕せん。嶮奇変じて粗強とならん」[27]といい、この故に五祖法演は願輪に乗じて東山の法門を開き、雲門の曲を唱え、臨済の剣を提げて仏祖の正脈を中興したとしている。

五祖法演の法嗣である円悟は碧巌集の著者である。この書は雲門宗の重顕が著す雪竇頌古に臨済宗の円悟が垂示・著語・評唱等を加えてできたものであり、臨済宗においては重要視された禅録である。松源はその禅をうけついだものである。のち大灯も関山も雲門の関字を透過したというのもこの故である。

南浦は楊岐の正脈を単伝したというが、楊岐松源の禅を純一無雑に伝えたので、単伝ということばがでているのであろう。宋朝の仏教界は習合折衷の思潮がさかんであった。さきに述べるように教禅一致や念仏禅がさかんであ

ったが、南浦は祖師禅のみを単伝したのである。この点曹洞禅を伝えた道元ともその軌を一にするものである。道元は純一なる仏法の立場から儒仏道三教の合一思想や楞厳・円覚等の経典を依用して禅を挙揚することを破斥している。応灯関も純一な立場をとり、向上の禅を究めて、自己を深く掘り下げる家風であった。南浦が楊岐の正脈を単伝したということは、日本禅宗史上重要な意味をもつものと思うのである。それは結果論的に、この法流が続いて今日にいたったからというのではなく、南浦が伝承した禅そのものが、そういう必然性をもっていたと思われるのである。「源深ければ流久し」ということばも、南浦の禅の深さをたたえたものであり、また同時に伝仏心印の厳粛性を意味するものであろう。

(二) 宗峰妙超

(1) 求道と長養

南浦の禅をうけつぎ、その光をいっそう盛大にしたものは宗峰妙超（しゅうほうみょうちょう）すなわち大徳寺の開山大灯国師である。播磨の人で、弘安五年（一二八二）紀氏浦上一国の子として生れた。出家して書写山にのぼり、のち禅道修行を志し諸方を遍歴したが、その求道の態度ははげしく、参禅の一問一答は電転じ星飛ぶというありさまで、到底尋常の人では指導ができなかったが、鎌倉万寿寺の高峰顕日(仏国)に接得され、高峰のもとで弁道した。一夕省悟して見解を呈したところ、「これ真正の見解なり、宜しく法幢をたてて宗旨を立すべし」と高峰から允許された。

しかしのち京都で南浦に参禅したとき、南浦はただちに宗峰の見解を許さなかった。南浦はのち鎌倉建長寺へ入

寺したが、宗峰は鎌倉へも随侍して参問求道した。関山は遺誡に「先師大灯老人、老祖(南浦)に西京に参得して京輦巨峰(建長寺)に侍者たり、其の随従の際、脇席に到らざる者多年、頗る古尊宿の風あり」というごとく、真剣な求道的態度を窺うことができる。遂に「雲門の関字」[28]を透過し、汗流満背の感激を得て方丈へ走り見解を呈し、雲門の関字は「幾乎(ほとんど)同路」即今和尚と趣きを同じくするであろうとした。南浦はおおいに驚き「夜来夢に雲門大師吾が室に入る。儞(なんじ)今日関字を透る。儞は雲門再来の人なり」と称揚したという。翌日南浦に呈した二偈は今日大徳寺に重文としてのこっている。

一回雲関を透過し了(おわ)って、南北東西活路通ず。夕処朝遊賓主没(な)し、脚頭脚底清風を起す。

雲関を透過し旧路なし。青天白日是れ家山、機輪通変人到り難し。金色の頭陀手を拱いて還る。

妙超の胸懐是の如し。若し師意に孤負せずんば、伏して望むらくは一言を賜へ。近く故都に帰らんと擬す。尊意を惜しむこと莫んば、以て大幸と為すのみ。

妙超九拝　原漢文

南浦はその紙尾に書し「儞既に明投暗合、吾儞に如かじ。吾が宗儞に到って大いに立し去らん。只是れ二十年長養して人をして此の証明を知らしめよ。妙超禅人のために書す。巨福山南浦紹明」[29]として印可した。南浦は「吾が宗儞にいたって大いに立し去らん」とたたえつつ、しかもなおかつ二十年長養せよという。ここに南浦の禅の特色がある。その悟道が徹底透関と正念相続に重点がおかれている。すでに宗峰は高峯から許され「これは真正の見解なり。宜しく法幢をたて宗旨を立すべし」と許されていた禅者であった。しかし南浦は許さず、悪辣な手段を以て鉗鎚し、いままた許しても、さらに二十年の長養をすすめている。東嶺の識見をもってすれば「仏国禅師(高峰)は

仏光の鐘愛、夢窓の特怙、豈容易に言を出して許可すべけんや。是れ大灯すでに悟り得て分明なり。只些子の事を欠く。大応面前に到っては、尚是れ影像辺の事、牛跡を以て大海に比するが如く、一毛を以て大虚に措くに似たり。云云」[93]といい、ただ些子の事を欠くとしている。東に仏国、西に大応といわれ、高峰と南浦とは当時禅界の双璧であったが、両派の家風の相違を見るのである。高峰の禅は人天度生に重点がおかれ、時代と社会を救う衆生済度の伝道接化にあるが、南浦の禅はどこまでも向上の道を究めて、千古に生きる家風であろう。

宗峰は南浦の示寂後、心衷をおわって京都にのぼり、東山雲居庵に棲止して雲水六、七人と刻苦自励し、飢寒を忘るにいたるといい、また五条橋下の乞食の群に入り悟後の修道をしたと伝えられる。古の祖師は六祖をはじめ韜晦して道を養った。かくれひそんでしかも精進勇猛であった。いま宗峰は南浦の道髄を得てその跡をくらましたが、宗峰の嗣関山も美濃伊深の山里にかくれて精修した。嗣法の後、世間を杜絶し名聞を退けて聖胎を長養したことは応灯関の特色でもあった。伝説によれば宗峰は甜瓜で乞食の群から釣り出されたといわれる。そして花園天皇と対坐談話した頃、天然の気宇王の如くであったと伝記記者はしるしている。宮中で道服裟袈を着け、天皇と対坐し「仏法不思議、王法と対坐す」との玉音に対し、「王法不思議、仏法と対坐す」と奏し、貴人天子といえども、おくせず媚びず、名聞心もなく、自由に談笑している。関山が遺誡に「卒に老僧淵粋の命を受け、長養する者二十年、果して大応遠大の高徳を彰す」というのもこれであろう。

(2) 示衆と遺誡

宗峰は大徳寺を開創したが、法堂を設けて仏殿を建てなかった。百丈の古清規によったものであろうか。法堂とは仏法を演法する仏堂であり、元来は仏像を安置しない。宗峰の面目躍如たるものがある。のち後醍醐天皇から五山之上の南禅寺へ住持するよう三詔されても辞退し、大徳寺を中国の径山に擬して五山第一の禅刹とし、おおいに伽藍を営まうとしても固辞した。名誉となるような官刹となるのを避けたのであろう。しかし朝廷は大徳寺を本朝無双の禅苑とし、また一流相承の寺とする宸翰を、後醍醐天皇・花園上皇から下賜された。その理由は宗峰の法流を重ずるためであった。

宗峰が望むところは寺格が高くなったり、寺が立派になることではなかった。ただ集る学徒に悟道専一なることを説き「汝等諸人此の山中に来って、道のために頭を聚む。衣食のためにすること莫れ、肩あって衣ずといふことなく、口あって喫せずといふことなし。只須く十二時中無理会の処に向って窮め来り究め去るべし。光陰箭の如し。慎んで雑用心すること勿れ」[31]と示衆している。

建武二年（一三三五）遺誡し

老僧行脚の後、或は寺門繁興、仏閣経巻に金銀を鏤め、多衆閙熱、或は誦経諷呪、長坐不臥、一食卯斎、六時行道、縦使恁麼にし去る雖も、仏祖不伝の妙道を以て胸間に掛在せずんば、忽ち因果を撥無し真風地に堕つ、併是れ邪魔の種族なり。老僧世を去ること久しくとも児孫と称することを許さじ。或は儻一人あり、野外に綿蕝し、一把茅底、折脚鐺内に野菜根を煮て喫して日を過すとも、専一に己事を究明する者は、老僧と日日相見、報恩底の人なり。誰か敢て軽忽せんや。勉旃、勉旃。[32]（原漢文）

これは示衆と合せて興禅大灯国師遺誡として、多少字句を修正し、今日も読誦されている。後世の禅のありかたを示したものである。いかに形の上で立派になり、学徒が集り、規矩が行われても、仏祖不伝の妙道を胸におかなければ真風は地に堕つ。小さな草庵で脚の折れた鐺で野菜根を煮なければならないような生活をしていても、己事を究明している者は宗峰と日日相見する報恩底の人であるという。まことに関山のいうごとく「真風不地の遺誡を残し、後昆を鞭策」したものといわなければならない。建武四年（一三三七）病となり、

仏祖を截断し、吹毛常に磨く。機輪転ずる処、虚空牙を咬む

の遺偈を書き、十二月二十二日、端坐して示寂した。世寿五十六歳。語録三巻のほかに仮名法語・祥雲夜話等の著書があり、また大灯百二十則[33]が残っている。この百二十則は禅道修行の根本である公案で、宗峰によって選出されたものである。ここにおいてわが国の禅は学人接得の指導法が確立した。のち近世にいたって白隠が出で、公案禅の再確認が行われるが、大灯百二十則はその先蹤をなすものとして意義が深い。

(三) 関山慧玄

(1) 求道と牧牛

宗峰は五百年間出の英霊漢であった。白隠は扶桑第一の毒華とたたえているが、宗峰はわが国禅界の最高峯である。終生向上の禅をもって機鋒するどく求道の学人に迫り、仏祖の正脈を堅持しようとした。遺偈の仏祖を截断するとは仏祖になりきることであり、吹毛とは利剣のことである。利剣は毛をあてて吹けば切れるという。宗峰は仏

祖を截断する吹毛剣を常に磨いて、悟道の真実ととりくんで来た。宗峰の遺偈にはすごみがある。国師号を大灯というが、まさしく大灯は千載に輝く大灯である。

宗峰には大弟子が二人いる。すなわち大徳寺を継いだ徹翁義亨と関山慧玄である。前者は法孫から一休を出し、沢庵を出したが、のち絶法してしまった。しかし後者の法孫には白隠が出で、今日の禅界はいずれもその児孫である。東嶺は「紫野吹毛の利剣、二十年琢磨し、仏祖を截断する手、却って関山のために奪はる」[39]といっている。

関山は諱を慧玄といい、関山は号である。妙心寺の開山で、諡号の無相大師をもって普通呼ばれている。信濃の人で、姓は高梨氏であり、建治三年（一二七七）に生誕した。鎌倉の広厳和尚を礼して剃髪し、大応国師に相見して慧眼（えげん）と命名されたと伝えられる。大応寂後、諸老に参じたが、嘉暦二年（一三二七）建長寺の開山大覚禅師の五十年忌に列席して、京都紫野大徳寺の宗峰が活手段を弄する宗師であることを知り、ただちに上京して宗峰に相見し門下となった。

関山は宗峰に相見する前、すでにその悟道は相当すすんでいたと思われるが、向上の大事を決するために真の善知識を求め、しかも時節因縁が熟さなかったのであろう。正法山六祖伝には、関山が宗峰に相見し、礼拝しおわるや否や「如何なるか是れ宗門向上の事」と問答したことが記されている。関山が払袖し去った後、宗峰は「作家の禅客天然に在り」とたたえたという。一両年を経て関字を透過し、宗峰から「宜しく関山と号し、旧諱慧眼を慧玄と改めよ」といわれ、頌をもって証せられた。

関山

鎖断路頭難透処　路頭を鎖断し透り難き処
寒雲長帯翠巒峰　寒雲長く帯ぶ翠巒の峰
韶陽一字蔵機去　韶陽の一字機を蔵し去る
正眼看来隔万重　正眼に看来れば万重を隔つ

為慧玄蔵主賦関山号

嘉暦己巳仲春、竜峰山宗峰妙超書

この嘉暦己巳は同四年（一三二九）であり、この年の八月元徳と改元されている。関山五十三歳のときである。なおこの関山号は国宝として妙心寺に襲蔵されている。そして翌元徳二年（一三三〇）悟道成就の印可を得た。

此の事卓犖として清虚に挺抜し、乃仏乃祖惟之を以て務む。苟しくも其人あれば則ち壁立万仞の処に於て、軽々に推し将ち去り、頭を回らさざる時節に到って、直に箇の悪竦の手脚を与へ、全体作用して他をして白的の地に勦絶するに到らしむ。古人旨を得るの後、深隠堅韜す。必ずしも虚廓の聖胎を長養せざれども、専ら亦後昆を憂ふるの意ある者なり。上人既に頓に本来と相応し、幽邃に起居し受用すること確乎たり。切に須く綿々として風を通ぜず、密々として緊く護惜せよ。他時異日吾が道を将って光輝せば、便ち是れ老漢徹悃の恩に孤負せざるのみ。

元徳二年仲夏上澣、宗峰叟妙超、慧玄蔵主の為めに書す[四]（原漢文）

古人は得道の後、岩に隠れ草に伏して道を養った。茅屋破庵に住し、われ鍋で菜根を煮て喫し日を過しても正念

の相続をして、向上の悟道を歩んで来た。他日縁に随って仏心印を伝え、仏祖の恩に報いようとしたのである。自ら求めて名利を思わず、ただこれ長年養道を専らにした。しかしこの聖胎長養をしないとしても、仏道の将来を憂えるからである。宗峰は印状に「切に須く綿々として風を通ぜず、密々として緊く護惜せよ。他時異日、吾が道を将って光輝せば、便ち是れ徹困の恩に孤負せざるのみ」と切々たる慈誡を記し、関山に与えている。関山は伊深の山里に韜晦し、牧牛の生活を送ること十年と伝えられる。宗峰の長養二十年といい、またその遺誡といい深く自己を掘りさげて己事を究明し、向上の悟道を重じたことは応灯関の特色であったと思うのである。

延元二年（北朝建武四年）宗峰病となり、宗峰に問法されていた花園上皇はことのほか驚かれ、宗峰に門下中大力量底の者を問われたので、宗峰は関山が道髄を得た者であることを奏し、また上皇は関山を迎えるために、花園の離宮をあらためて禅寺としたいから、山号寺号をいかにすべきかと下問され、宗峰こたえるに正法山妙心寺と命名した。この年の十二月宗峰は示寂したが、関山が捜し出されて妙心寺へ入寺したのは暦応年中のこととされる。

(2) 関山の無相禅

法山六祖伝の記すところによれば、関山は世間的な外見や形式にとらわれることなく、ただ仏法久住のため門下の育成につとめた。威儀礼楽にかかわることもなく、読経規式にも拘泥しなかった。殿堂の荘厳も意に介することもなく、道具を飾ることもしなかった。藤蔓をわぐねて袈裟の環とするといったような枯淡なものであった。室内には無用の長物はなく、ただ両朝から下賜された宸翰のみが鄭重に箱に入れられていた。しかし門下接得の室内は

きびしく棒喝交馳するのみであり、よほどの上根の者でなければ、堪え得ることができなかった。先師宗峰の寂後、宗峰門下の雲水が関山の室に投じて来た。中には甥の雲山宗峨もいたが、あえて人情を挟まなかった。雲山は打出されること二十五度といわれる。しかし関山は単に気性がきびしく、雲水につらくあたったというのではない。春雨の日茶摘みする雲水を見て「なんぞ清衆を湿却せしむるや。急に茶樹を伐り来って、庫内において摘ましめよ」と役位の僧を誡めた。ただ「一味に向上の鼻巴を弄す」といい、真個禅を手に入れ、仏法を究めることにきびしかったのであろう。鼻とは牛の鼻である。牛を御するのは鼻綱である。禅を自由に把捉し、仏法の極地を究めゆくことにきびしかった。門下の中には相当力量のあった雲水もいたであろうけれど、道髄を得て印可された者は授翁宗弼一人のみであった。

関山には語録もない。多少の法語はあったのであろうが、今日伝っているものは「本有円成仏、甚んとしてか迷倒の衆生となるや」「慧玄が這裏に生死無し」「栢樹子の話に賊機あり」といった語が残っているのみである。また肖像もなく、法孫の春夫宗宿が松源十祖像を作ったとき、関山には模写する肖像がなく、やむを得ず一円相を画いて、頂相としたほどである。[36] また遺誡にしても「老僧爰に花園仙帝の勅請を受けて此の山を創開するも、先師飯を嚼んで嬰児を養ふ。後昆直饒老僧を忘却するの日ありとも、応灯二祖の深恩を忘却せば老僧が児孫に非ず。汝等請ふ其の本を務めよ」といい、すべてを応灯二祖の功としている。関山は全く無相の禅者であった。

凡そ仏道を行ずる上に有相と無相の二つがある。人によっては無相の深理を観ずることは易いが、有相の行を修することをうるさく思う人もあるし、また有相の行を修するが、無相の法理を観ずることは契わぬ人もある。古の

名徳でも誦経諷呪、称名、礼讃等数多くの有相の行を修する人もあった。宗峰の遺誡のごときは有相の行を否定している。もし仏道を行ずるのに、有相・無相の判をするとすれば、応灯関は最上根の無相の仏道であり、関山は無相に徹した禅者であった。関山の無相の禅は最上根の仏者のありかたであり、仏祖の慧命を継ぐ正脈の禅であるとしても、その法宝を理解し庇護する者がなければ、その発展を期することはできない。この意味において花園法皇の願輪[37]は関山の無相禅具現の上に大いなる意義をもつものである。

(1) 沙石集巻一〇
(2) 禅学研究五四号、拙稿「栄西の一心戒について」
(3) 本朝高僧伝
(4) 仝上
(5) 大覚拾遺録(大日本仏教全書)
(6) 大覚禅師坐禅論
(7) 仝上
(8) 大覚禅師省行文
(9) 無準師範禅師語録巻五
(10) 仏光録巻四
(11) 夢窓国師語録　巻上
(12) 仝上　巻下
(13) 夢中問答　巻下

(14) 谷響集　上
(15) 夢中問答　巻下
(16) 国訳禅学大成巻二三　夢窓録付西山夜話談
(17) 夢中問答　巻下
(18) 谷響集　巻下
(19) 夢窓録拾遺三会院遺誡
(20) 宗門無尽燈論巻上、(向上第六)
(21) 虚堂録巻一〇、この虚堂自賛の頂相は大徳寺に襲蔵され、重文である。
(22) 五燈会元巻一九、楊岐方会の章、「室中問僧、栗棘蓬伱作麼生呑、金剛圈伱作麼生透」
(23) 虚堂録巻一〇
(24) 宗門無尽燈論　巻上(向上第六)
(25) 仝上　(向上第六)
(26) 五燈会元巻二〇虎丘紹隆法嗣の章
(27) 宗門無尽燈論　巻下(力用第七)
(28) 翠巌夏末示衆曰、一夏以来与二兄弟一東説西話、看翠巌眉毛在麼、保福曰、作賊人心虚、長慶曰生也、雲門曰、関
(29) 大燈国師行状
(30) 宗門無尽燈論巻上(向上第六)
(31) 大燈国師年譜　正慶元年の条
(32) 仝上　建武二年の条
(33) 拙著日本中世禅宗史参照
(34) 宗門無尽燈論巻上(宗由第一)
(35) 正法山誌巻二

(36) 拙著日本中世禅宗史参照

(37) 花園法皇「往年の宸翰」

往年先師大燈国師の所に在りて、この一段の事に於て休歇を得たり。特に衣鉢を伝持するの後、報恩謝徳の思、興隆仏法の志、寤寐にも忘るることなし。而れども心事依違して今に其の願を遂げず。頃年病痾纏牽、旦夕期し難し。空しく溝壑に塡らば永劫の恨、何事かこれに如かん。仍て一流再興并に妙心寺造営以下の事、仙洞に申し置くの子細これ在り、縦ひ一瞬を過すとも、必ず平生の志を満すべし。門徒の中其の仁他に在らず、遠慮を廻らし興隆の願を果さるべし。故に鳥跡に遺して蓄懐を述ぶる者なり。

貞和三年七月二十二日　（花押）

関山上人禅室

（原漢文）